孫たちは齢七十の白髪の老人を見出すことだろう
（詩宴もたけなわとなり）すでに作詩は仙境に達し思い残すことはない
式部大輔たる私の佳興はあの「秋興賦」を作った晋の潘岳以上のものがある

（二〇〇〇年十月二日受理）

て、気がつくと持っていた斧の柄が朽ちてしまうほどの時が経っていた。音楽や行事に夢中になり時の経つのも忘れてしまうたとえ。「晋王質、伐木至信安郡石室山、見数童子囲碁。与質一物、如棗核。含之不飢、局未終、斧柯爛尽。既帰、無復時人」〈『述異記』〉

「遠尋曲澗柯応爛高臥清流枕転欹」〈『扶桑集』巻七「樵隠倶在山」清仲山〉「ももしきは斧の柄くたす山なれや入りにし人のをとづれもせぬ」〈『後撰和歌集』七一七「内に参りて久しう音せざりける男に」〉平安文学における「爛柯」の故事については、上原作和「〈爛柯〉の物語史―「斧の柄朽つ」る物語の主題生成―」〈『講座平安文学論究』第十二揖 風間書房〉に詳しい。また「爛柯」の故事が本朝において仙境故事として用いられるうちに、他の仙境故事と混同されていく過程については、田中幹子「『斧の柄朽ちし王質』が『七世の孫に会う』こと―漢故事変容の諸相―」〈『就実語文』一九号〉に詳細な考察がある。

◎後葉＝後代、子孫。「恐後葉靡麗、遂往而不返　非所以為継嗣創業垂統也」〈『文選』巻八「上林賦」司馬相如〉

◎七袤＝袤は袤に同じ。十年の意、秩に同じ。したがって七袤は七十年。「年開第七袤　屈指幾多人」〈『白氏文集』三〇五六「七年元日対酒五首 其の二」〉。群書類従本以外の諸本はすべて「七葉」だが、同じ句の中に「後葉」があり、葉字が重複するので採らない。七葉ならば七代の意。なお、前掲田中論文によれば、「爛柯」の故事が七世（代）の孫と結びついた確実な例は鎌倉時代初期まで下るが、実際は平安末期にはそのような解釈が広まりつつあったのではないかという。もしも本詩句が「七葉」であるならば、最もはやい例となるが、前述の理由から採らない。

◎詩仙＝詩の仙境、神仙の如き詩人。初句の「洞中」の縁で仙と言う。「知我者、以為詩仙、不知我者、以為詩魔」〈『白氏文集』「与元九書」〉「忝随詩仙之後、還慙文賓之情而已」〈『本朝文粋』巻十一「九日侍宴同賦寒菊戴霜抽」大江朝綱〉

◎心事＝心に思うこと。心中の思惑。「心事倶已矣　江上徒離憂」〈『文選』巻二十「新亭渚別范零陵詩」謝朓〉

◎侍郎＝二十二「九月尽日惜秋言志」「侍郎」の語釈参照。

◎佳興＝よい興趣。「秋色有佳興　況君池上閒」〈『全唐詩』巻百二十五「崔濮陽兄季重前山興」王維〉

◎潘郎＝「秋興賦」を作った晋の潘岳をさす。「晋十有四年、余春秋三十有二、始見二毛。以大尉掾兼虎賁中郎将、寓直于散騎省。―中略―於是染翰操紙、慨然而賦。于時秋也。故以秋興命篇」〈『文選』巻十三「秋興賦 序」潘岳〉「楚客悲哉之詞　晋郎感興之作」〈『経国集』「重陽節神泉苑賦秋可哀」嵯峨天皇〉

【通釈】

九月が終わる日内御書所において、皆で秋はただ一日を残すのみという題で詩を作る

仙界にも比すべき宮中での合宴に帰郷することも忘れてしまう
秋の終わり、ただ一日の光を残すのみとなった
今宵宮中の階蓂の莢はすべて落ち尽くしてしまっても
明日の朝籬の下の残の菊はまだ香りを漂わせていることだろう
あの晋の王質が斧の柄を朽ちさせたごとく、ここ御書所の詩宴にふけって日が暮れても気がつかない
（時の経つのも忘れて詩作に没頭していたので）帰宅すれば子

後葉空逢七袞*霜　　後葉空しく逢はむ七袞の霜
已到詩仙心事定*　　已に詩仙に到りて心事定まれり
侍郎佳*興過潘郎　　侍郎が佳興潘郎に過ぎたり

【校異】

1，日―ナシ（内A、東A、B、静、陽、島、東北、京、無、山、祐、神）2，芸―云（内A）―書（島）―共〔ミセケチシテ「芸」ト傍書〕（静）3，中―　（鶴）4，郷―卿（内A、東北、祐）5，杪―抄（京、祐、神）―秒（内A）6，唯―只（内A、静、東A、B、島、賀、鶴、多）7，袞―葉（内A、静、東A、B、陽、無、京、島、東北、山、祐、神、賀、鶴、多）8，定―足（内A、静、陽、東A、B、無、島、東北、山、祐、賀、鶴、多）9，佳―侍〔ミセケチシテ「佳」ト傍書〕（神）

【押韻】

×○××××○◎　○×○○××◎（下平声唐韻）
○×○○○××　○○○××○◎（下平声陽韻）（唐同用）
×○※××○○×　××○○××◎（下平声陽韻）（唐同用）
××○○○××　×○○※××○◎（下平声唐韻）

【語釈】

◎秘芸閣＝内御書所の唐名。一般に内御書所の唐名は秘閣、秘書閣、芸閣等。匡衡は式部権大輔と内御書所別当を兼任していた。「東海為使君、北闕為侍臣、東宮為賓客、北堂為主人、李部為大卿、芸閣為別当。一身兼六事者、古今所未聞也―中略―長保三年三月三日　尾張守大江朝臣匡衡」〈『本朝文粋』巻七「奉行成状」大江匡衡〉内御書所での詩人の活動については、工藤重矩「内御書所の文人」〈『中古文学』二六号、のち『平安朝律令社会の文学』（ぺりかん社）に収録〉に詳しい。

◎洞中＝宮中を仙境に見立てての措辞か。「洞中清浅瑠璃水　庭上蕭条錦繡林」〈『和漢朗詠集』巻上 紅葉 慶滋保胤〉

◎合宴＝一緒に宴を開く。宮中で、御前での詩宴と同時に内御書所でも文人による詩宴が開かれたことをいう。↓前掲「内御書所の文人」。

◎秋杪＝秋の末、晩秋。杪秋も同じ。「再来値秋杪　高閣夜無喧」〈『全唐詩』巻百六十「夜登孔伯昭南楼時沈太清朱昇在座」孟浩然〉

◎階蓂＝堯帝の時、階の前に生じた瑞草の蓂莢。月の初めに一莢を生じ、一五日まで毎日一つずつ莢を生じる。一六日目からは一莢ずつ落ち、これによって暦を作ったという。堦蓂。「帝王世紀曰、堯時有草莢階而生。毎月朔生一莢、月半則生十五莢。自十六日一莢落。至月晦而尽。月小則余一莢。厭而不落。以為瑞草、名蓂莢、一名暦莢」〈『芸文類聚』歳時中 月晦〉「信如四気明並三光 廚蓮挺茂 堦蓂比芳」〈「七契 其の七」昭明太子〉「月照階蓂水醴泉」〈『本朝文粋』巻一「時和年豊詩」橘在列〉

◎籬菊＝まがきのもとの菊。「采菊東籬下　悠然望南山」〈『文選』巻三十「雑詩二首 其の二」陶潜〉による。

◎余芳＝他が散った後も残っている花。「烟霞識虎丘　余芳認蘭沢」〈『白氏文集』二七一七「想東遊五十韻」〉

◎爛柯＝爛柯の故事。晋の王質が山中で童子の碁を打つ所を見てい

とは、同「近日蒙綸命、点文集七十巻。夫江家之為江家、白楽天之恩也。――中略――匡衡独為文集之侍読、挙周未遇昇。欲罷不能、以詩慰意」詩のほか、「可被上啓挙周明春所望事」〈『本朝文粋』巻七〉「熱田宮祈誓男挙周明春侍中所望状」〈『朝野群載』巻三〉等の書状、祈誓文からもわかる。挙周の蔵人任官のために匡衡が行った運動については、今浜通隆『本朝麗藻全注釈』二〈新典社 平成十年〉の三百二十ページからの記述や、北山円正「大江匡衡「除夜作」とその周辺」〈『神女大国文』第十一号平成十二年三月〉に詳しい。また、挙周の蔵人拝任時の匡衡の喜びについては上記二論文のほか、林マリヤ『匡衡集全釈』〈風間書房平成十二年〉の七十三番歌の注釈にも記述がある。

◎相公群息感＝相公は参議の唐名。江相公大江音人か。但し「群息感」については 未詳。或いは、江談抄に見える、音人が臨終の際に、自分が国家のために忠誠を尽くしたので子孫達は必ず高位に登るであろうといい残した逸話を指すか。「仍音人卿最後被談ケルハ、我子孫ハ依国家致忠必仕帝王可至大位也」〈『類聚本系江談抄』第二「音人卿為別 当時長岡獄移洛陽事」〉

◎侍郎＝吏部侍郎のこと。式部大輔の唐名。匡衡の任式部大輔は「二十 秋夜閑談」「吏部外員」の語釈参照。

◎解嘲詞＝前漢の楊雄の「解嘲」のこと。栄達して高官となり政治の中枢に参画できない不遇感を、客の嘲りに反論するという形で述べた。その中に、客が楊雄の官位が侍郎にすぎないと非難する箇所がある。「然而位不過侍郎、擢纔給事黄門。意者玄得無尚白乎。何為官之拓落也」〈『文選』巻四十五「解嘲」楊雄〉

【通釈】

九月尽日、秋を惜しんで思いを述べる。

若者でさえも秋を惜しんで心を苦しめる
まして、老いて落ちぶれた無用の人にいたってはどれほどの思いか
私自身は宮中の詩宴において帝の御前で詩を披露するうちにすっかり老いてしまったが
我が家は十代にわたる帝王の侍読を勤めてきたのだ
紅顔の少年だったのはつい昨日のことのようだが、我が人生は終わりに近づいている
白髪が霜の如く私の頭を覆う年になっても、我が子挙周の栄達は遅れている
我が祖江相公音人が遺した、子孫栄達の言葉を内心慕っているのだが
式部大輔でしかない私は楊雄の解嘲詞を読む度に耐え難い思いにとらわれるのだ

〔「解嘲詞」は『文選』にある〕

二十三　九月尽日*於秘芸*閣同賦秋唯残一日詩一首〔以光為韻〕

洞中*合宴忘家郷*　　洞中の合宴家郷を忘る
秋杪*唯*携一日光　　秋杪唯携ふ一日の光
今夕階蓂雖落尽　　今夕階蓂落ち尽くさむと雖も
明朝籬菊有余芳　　明朝籬菊余芳有らむ
爛柯不識残陽景　　柯を爛らすとも識らず残陽の景(かげ)

（東北）7，子―栄（静）8，〔此事見文選〕―本文二混入（祐）―本文二混入〔「此五字注当二行細書」ト傍書〕（東北、山、賀）9，〔此〕―本文二混入（鶴）10，事―年（鶴）―斗〔「事歟」ト傍書〕（東北、山、賀）

【押韻】

×○○×××○×　○×○○×××◎（上平声之韻）（支之脂同用）
○×××○○××　○○×××○◎（上平声脂韻）（支之脂同用）
○○○×○○×　××○○×××◎（上平声脂韻）（支之脂同用）
○×××○○××　×○○×××○◎（上平声之韻）（支之脂同用）

【製作年次】

詩中の「帝王師」「子達遅」「侍郎」等の語句から、匡衡が一条天皇の侍読と式部権大輔を兼任していた長徳四（九九八）年冬以降、息子挙周が蔵人となる寛弘三（一〇〇六）年春以前のいずれかの九月末と思われる。

【語釈】

◎言志＝二十　秋夜閑談「言志」の語釈参照。詩題とした例は、「奉和永豊殿下言志」〈庾信〉、「登三台言志」〈『全唐詩』一　太宗〉など。本邦では『懐風藻』に「秋日言志」〈釈智蔵〉があるのが早い例。

◎少年猶亦惜秋苦＝少年は若者。今の青年にあたる年代までを含み、必ずしも十代のみを指すものではない。何らかの詩歌が念頭にあるものと思われるが未詳。「惜秋」は日本独自のもので、九月末を題材にする「九月尽」も白詩にみえる「三月尽」と対応させるために日本で発達したもの。↓奥村（太田）郁子「『和漢朗詠集』の三月尽と九月尽」（『国文学言語と文芸』九十一号　一九八二年）

◎閑人＝無用の人。「五十年来思慮熟　忙人応未勝閑人」〈『白氏文集』二五三八「閑行」〉

◎潦倒＝老いて落ちぶれたさま。「毎遇凄涼事　還思潦倒身　略　無憂亦無喜　六十六年春」〈『白氏文集』三三一六「感事」〉

◎五花＝五花館のことか。五花館は唐末、荊南にあった旅館の名。「待客之上地」といわれた。〈『南部新書』〉平安朝漢詩文では宮中の詩宴をいうか。次句に「十葉」とあるごとく、「花」「葉」の対句として使われることが多い。「雖襲余風於三葉之家　未発麗事於五花之席」〈『本朝文粋』巻三「鳥獣言語対策」菅原淳茂〉「散卒降虜之士　貂蟬伝七葉之風　葛牧賈胡之家　出入歩五華之月」〈『本朝麗藻』巻下「七言　早夏陪宴、同賦所貴是賢才応製詩序」大江以言（『本朝文粋』巻九にも所収）〉

◎十葉帝王師＝十葉は十代。大江家の始祖音人が清和天皇の侍読となってから〈『二中歴』第二「儒職歴」〉、匡衡が侍読を勤めた一条天皇までは十一代。前句の「五花」と対にするために「十葉帝王」としたもの。

◎紅顔＝つやつやした若々しい顔。少年、若者をいう。「此翁白頭真可憐　伊昔紅顔美少年」〈『全唐詩』巻五十一「有所思」宋之問　巻八十二「代悲白頭翁」劉希夷〉

◎子達遅＝子は匡衡の息挙周。匡衡が挙周に期待していたことは本集中巻人倫部の「喜愚息挙周賜学問料。聊写所懐寄呈廊下諸賢」詩等から窺え、挙周の栄達、特に六位蔵人拝任を熱望していたこ

◎自得＝自然に得る。「妻子在我前　琴書在我側　此外吾不知　於焉心自得」〈『白氏文集』〇三七六「自余杭帰宿淮口作」〉

◎出雲越国外＝空のかなたの地。白居易の「三五夜中新月色　二千里外故人心」〈『白氏文集』七二四「八月十五夜禁中独直対月憶元九」（『和漢朗詠集』巻上「八月十五夜」所収）〉など、都を遠く離れた地の秋を思いやる詩を踏まえるか。

◎四隣＝隣近所、周囲。「林園四隣好　風景一家秋」〈『白氏文集』二三七九「履道新居二十韻」〉

◎才客＝才能のある客人。

◎成市林＝一般に「成市」「成林」で成語。市に人が集まる如く、林に木々が茂る如く、大勢集まるさま。「堂上如華　門前成市」〈『本朝文粋』巻六「申民部大輔状」橘直幹〉「功徳成林　普開恵花於四生之意樹　菩提分種　将灑甘露於六種之身田」〈『本朝文粋』巻十四「村上天皇母后四十九日御願文」大江朝綱〉「上責崇曰、君門如市人、何以欲禁切主上」〈『漢書』「鄭崇伝」〉ここは字数と脚韻の関係で二語を合したか。

【通釈】

秋の終わりに中務卿宮の書斎に陪し、皆で秋のすばらしい風景が一家中に集まっているという題で詩を作る

天はあたかも宮様のために特別の配慮をしたかのようだ
趣ある秋の景色はただこの家のうちだけに深まっている
宮様のお屋敷で旨酒を酌み交わしていると前栽には夜露が繁く降り
前栽の竹を眺めて琴をかき鳴らせば、その音に和すかのように冴え冴えとした秋風の音
皆で月を眺めていると、秋の風趣は自ずからこの築地の内に満ちている
いったい誰がわざわざ空のかなたの遠国に秋の景色を求める必要があろうか
近隣の人々よ今日のこの行事を妬んではならぬ
宮様の邸には才能ある人々が市をなしているのだから

二十二　九月尽日惜秋言志*

少年猶亦惜秋苦*　　少年猶ほ亦秋を惜しみて苦しめり
何況閑人潦倒時*　　何そ況や閑人潦倒の時
身老五花風月席　　身は五花風月の席に老ゆ
家経十*葉帝王師　　家は十葉帝王の師を経たり
紅*顔如昨西頽早*　　紅顔昨の如けれど西に頽くこと早く
白髪為霜子*達遅　　白髪霜と為れど子の達すこと遅し
心慕相公群息感　　心に慕ふ相公群息の感
侍郎不耐解嘲詞　　侍郎は耐へず解嘲の詞
*****〔此事見文選〕*　　〔此の事文選に見えたり〕

【校異】

1，志―忠〔ミセケチシテ「志」ト傍書〕（内A）　2，苦―苔（島）　3，時―ナシ〔「時」ト傍書〕（東A）　4，十―千（静、東A、陽、京、東北、山、祐、神、賀、鶴）　5，紅―経（鶴）　6，早―旱

四隣莫妬此間事　　四隣妬むことなかれ此の間の事
才客*於茲成市林　　才客茲において市林を成せり

【校異】

1，暮―慕（内A）　2，中―申（東北）　3，斎―斉（内A、島、山、祐）　4，秋応教〔以深為韻〕―ナシ（陽、東A、京、無、東北、山、祐、神、賀、鶴）　5，深―除（島）　6，苑―花（鶴）　7，撫―拾〔ミセケチシテ「撫」ト傍書〕（内A）　8，風―ナシ（鶴）　9，看―者〔ミセケチシテ「看」ト傍書〕（内A）　10，出―公（陽、京、島、山、祐、神、鶴）―公〔ミセケチ有リ〕（東北、賀）―公〔「出イ」ト傍書〕（無）　11，客―容（東A、無、祐、神）

【押韻】

○×××○×××◎（下平声青韻）　○○×××○×○◎（下平声侵韻）
○○×××○×　×××○○○×◎（下平声侵韻）
○×○○○××　×○×××○◎（下平声侵韻）
×○×××○×　○×○○○×◎（下平声侵韻）

【語釈】

◎中書大王＝中務卿宮の唐名。後中書王具平親王。
◎風景一家秋＝『白氏文集』二三七九「履道新居二十韻」による。「林園四隣好　風景一家秋」秋の風景のすばらしさが一家中に集まっている。
◎有心＝心がある。思うところがある。「提携払拭知恩否　雖不能言合有心」〈『白氏文集』三〇六九「問支琴石」〉
◎蘭台＝楚王の宮殿。ここは具平親王の邸、千種殿をいう。「楚襄王遊于蘭台之宮、宋玉、景差侍、有風颯然而至」〈『文選』巻十三「風賦」序　宋玉〉「千種殿〔六條坊門北西洞院東中務卿具平親王家〕」〈『二中歴』第十「名家歴」〉
◎置酒＝酒盛りをする。「置酒高堂　悲歌臨觴　人寿幾何　逝如朝霜」（『文選』巻二十八「短歌行」陸士衡）
◎露濃色＝露は酒の異名。具平親王邸の庭に夜露が降りている様子と、酒宴での酒が香りがよく濃いものであることを重ね合わせる。→本間洋一「王朝漢詩の飲酒詠管見―その語彙・故事をめぐる覚書として―」〈『同志社女子大学日本語日本文学』第四号一九九二年十月〉
◎竹苑＝前漢の孝文帝の子、孝王が竹を多く植えて修竹園と名づけた故事を踏まえる。ここは具平親王邸の前栽の竹をいう。「梁園〔梁孝王有修竹園〕」〈『白氏六帖』巻三竹〉「蘭陵竹園之驚貴命」〈『本朝麗藻』巻下「七言。早夏陪宴同賦所貴是賢才各分一字。応製詩序」大江以言〉「還似漢皇連句宴　竹園槐府率群臣」〈『江吏部集』巻中「七言。早夏陪宴同賦所貴是賢才各分一字。応製詩」〉
◎風冷音＝風の音と琴の響きの組み合わせは『李嶠百二十詠』四「風」の「松声入夜琴」による。「琴の音に峯の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん」〈『拾遺和歌集』巻八雑上四五一「野宮に斎宮の庚申し侍けるに松風入夜琴といふ題を詠み侍ける」斎宮女御〉
◎周墻＝墻は垣根、築地。邸の周囲にめぐらせた築地。「真珠万顆周墻下　寒火一鑪孤盞中」〈『本朝無題詩』巻二「賦覆盆子」藤原忠通〉

していた北山（鐘山）を出て官途につくことを、山霊が非難するという内容。ここでは、匡衡が自分の現状に不満を持ちながらも官途を捨てて隠遁する決心がつかないことを「愧北山雲」と言ったもの。「誘我松桂、欺我雲壑。雖仮容於江皐、乃纓情於好爵」〈『文選』巻四十三「北山移文」孔稚珪〉「忝侍南氏之席　慙動北山之移」〈『本朝文粋』巻九「暮春南亜相山庄尚歯会詩序」菅原是善〉

◎鮑叔＝鮑叔牙は春秋、斉の大夫。親友であった管仲を良く理解し、管仲の仕えていた公子糾が鮑叔の仕えていた公子小白（後の斉の桓公）に敗れ死んだとき、鮑叔は管仲を公子小白に薦めて相とした。「管鮑の交わり」で知られる。「管仲曰、吾始困時、嘗与鮑叔賈。分財利、多自与。鮑叔不以我為貪、知我貧也。吾嘗為鮑叔謀事而更窮困。鮑叔不以我為愚、知時有利不利也。――中略――公子糾敗、召忽死之。吾幽囚受辱。鮑叔不以我為無恥、知我不羞小節、而恥功名不顕于天下也。生我者父母、知我者鮑子也」〈『史記』「管晏列伝」〈『列子』『芸文類聚』「交遊」にも出〉〉「七十箇廻衰老後若非鮑叔証知吾」〈『本朝無題詩』巻五「聊成閑中之偶詠。令慰老後之愁吟而已」藤原茂明〉

◎龍媒＝龍媒は天馬のごとき名馬。すぐれた人材の譬え「吏道竟殊用　翰林仍忝陪　長鳴謝知己　所愧非龍媒」〈『全唐詩』巻二百十一「和賀蘭判官北海作」高適〉

◎目想心看＝目に想い心に看る。心の内に思い浮かべ慕うこと。「毎読五柳伝　目想心拳拳」〈『白氏文集』二七八「訪陶公旧宅」〉

◎萬一＝万の中の一、多くのものの中の一つ。

◎斯文＝この文、儒教の学問。「文王既没、文不在茲乎。天之将喪斯文也、後死者不得与於斯文也」〈『論語』子罕〉

【通釈】

秋の夜の閑談

文章博士は激職ではなく
式部権大輔としても同輩たちからは遅れをとる身
ここ道長様の書斎で月を眺めて思いを述べ詩を作る
名誉を求めれば今の境遇は不満だが、隠棲することもできず、
北山に懸かる雲に対して恥ずかしく思う
今偶然にもあの鮑叔の如く私のことを理解してくださる方に出会えた
そのすばらしい才能に付き従ってお仕えしてみよう
いったい何を心に思い浮かべて待ち望むというのか
いろいろな方法がたくさんあってもこの儒学の道に志すことには及ばない（儒者としての私を道長様は理解してくださるのだから）

二十一　暮秋陪中書大王書斎同賦風景一家秋応教〔以深為韻〕

天為大王似有心　　天　大王の為に心有るに似たり
秋教景趣一家深*　　秋　景趣をして一家に深ならしむ
蘭台置酒露濃色　　蘭台に酒を置く露の濃かなる色
竹苑撫絃風冷音*　　竹苑に絃を撫づ風の冷かなる音
看月周墻中自得　　月を看れば周墻中自づから得たり
出雲越国外誰尋*　　雲を出でて国を越え外に誰か尋ねむ

将就龍媒試事君　　将（まさ）に龍媒に就きて試みに君に事へんとす
目想心看何所待〔侍イ〕　目に想ひ心に看て何の待つ所ぞ
不如萬一志斯文　　如かず萬一斯の文に志さんには

【校異】

1，外員―員外（底）諸本（内A、陽、静、京、島、東北、山、祐、神、賀、鶴、多）ニヨッテ改ム　2，群―郡（京、祐、神、鶴）　3，閣―閣（陽、京、東北、山、祐、神）　4，愧―塊（島、鶴）　5，事―筆（京）　6，待―侍（鶴、多）侍〔「一待」ト傍書〕（静）―侍〔「待歟」ト傍書〕（東北、賀）　7，志―忠〔ミセケチシテ「志」ト傍書〕（内A）―著（静、東北、賀、鶴、多）

【押韻】

×○××○○×　　×××○○×◎（上平声文韻）
○×○○○××　　×○○××○◎（上平声文韻）
×○××○○×　　○×○○××◎（上平声文韻）
××○○☒××　　☒○××××○◎（上平声文韻）

【製作年次】

詩中の「翰林学士」「吏部外員」より、匡衡が文章博士と式部権大輔を兼任していた寛弘六年秋と考えられる（【語釈】参照）。

【語釈】

◎閑談＝のんびり語り合うこと。「飽食安眠銷日月　閑談冷笑接交親」（『白氏文集』二六八四「快活」（『千載佳句』「閑放」にも所収）「閑談知照膽　莫勧折燈花」（『菅家文草』巻二「夏夜対渤海客、同賦月華臨静夜詩」）

◎翰林学士＝文章博士の唐名。匡衡の文章博士任命は永祚元（九八九）年から五年までと、寛弘六年から七年七月までの二度（『二中歴』第二「儒職歴」）。

◎忿劇＝「忿イソカハシ」（『観智院本類聚名義抄』）「劇ハナハタシ　イソカハシ」（観智院本『類聚名義抄』）忙しいこと、激務。

◎吏部外員＝吏部は式部省の唐名。外員は員外に同じ、権官。平仄の都合上、「員外」だと第二句が二四不同の詩律をを犯すことになるので入れ替えたもの。但し、この場合も、四字目が孤平を犯すことは避けられない。匡衡は長徳四（九九八）年から寛弘二（一〇〇五）年までと、寛弘五年から六年までの二度にわたって式部権大輔の任にあった。（『中古歌仙三十六人伝』）

◎後群＝胞輩に後れをとること。「遷喬之翅難慰　後群之憂難休」（『平安遺文』応徳二年一二月一六日条「請殊蒙天恩依奉公労被拝任右京権大夫闕状」藤原宗季）

◎言志＝心に思っていることを言う。詩を作る。「詩言志、歌永言」（『尚書』舜典）

◎東閣＝「漢書。公孫弘為丞相、開東閣、以招賢人。後封平津侯。丞相封侯、自弘而始也」（真福寺本古鈔本『蒙求』四九〇「漢相東閣」）五「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照牖前竹応教」「公孫弘曰」の語釈参照。

◎徇名＝「徇シタガフ」（観智院本『類聚名義抄』）ひたすらに名誉を追い求めること。「貪夫徇財、烈士徇名」（『史記』「伯夷列伝」）

◎北山雲＝北山は南斉の孔稚珪の「北山移文」のこと。周顒が隠逸

―是夕家婦女結綵縷、穿七孔針、或以金銀鍮石為鍼、陳瓜果於庭中以乞巧。―後略―」〈『荊楚歳時記』〉「七日乞巧奠事　兼日蔵人令成廻文、令催雑役雑色以下、当日掃部寮鋪葉薦於清涼殿東庭［当南第三門］。其上鋪長筵［東西妻］、内蔵寮官持雑器奠物候於仙華門外、雑色以下伝取供之―中略―召内侍所粉五合、散机上及筵上、立御倚子於庭中［或無之］、為覧二星会合也［令殿上侍臣結番］。窺之、蔵人取御挿鞋祗候、鋪座於河竹台東、為雑色以下祗候座［式可候南廊下云云］。或有御遊御作文等事、事了給禄、及暁更撤之、事了下格子［雖達明、猶下之又上云云］。涼闇時猶祭［天暦八］、内裏穢時猶祭［応和二］。雨湿時設於仁寿殿西庇下。―後略―」〈『江家次第』七月〉「憶得少年長乞巧　竹竿頭上願糸多」〈『千載佳句』七夕（『和漢朗詠集』七夕にも所収）〉

◎慇懃＝熱心なさま。「慇懃ネムコロナリ」〈観智院本『類聚名義抄』〉

◎徘徊＝うろうろとさまようこと。「徘徊タチモトホル」〈観智院本『類聚名義抄』〉

◎馬卿橋＝馬卿は前漢の政治家司馬相如のこと。『蒙求』「相如題柱」に見える、相如が蜀を出るときに、橋に「四頭立ての馬車に乗るような身分に出世するまでは二度とこの橋を渡らない」と書き付け、その言葉通り中郎将となって帰ってきた故事を踏まえる。「前漢司馬相如、字長卿、成都人。蜀城北七里、有昇仙橋。相如題其柱曰、大丈夫不乗駟馬車、不復過此橋。後遷中郎将、入蜀。郡守郊迎、県令負弩先駆。蜀人咸以為楽」〈応安頃刊五山版（準古注本）『蒙求』四〇一「相如題柱」〉

【通釈】

七夕の夜、庚申を守って皆で織女が身なりを整えるという題で詩を作る

ひとこと申し上げたい、落ち着かない気持ちでいる織女よ
（貴女は）一年に一度のはるかな契りを思って身なりを整えている
霞のような袂を上げて玉で飾った簪をあれこれと整える
化粧鏡の前にしずかにすわり三日月のような眉でほほえむ
舞の名手趙飛燕が蘭湯を賜ったのは七夕の夜ではないが、織女は今夜湯浴みする
漢の美女李夫人にも匹敵する織女の名声は天高く響きわたる
この夜地上では熱心に乞巧奠を営むが、天はきっとその願いをかなえてくれるだろう
ただ私だけは辺りをさまよい、司馬相如のように栄達が叶わないことを恥じているのだ
（だから私の栄達の願いもかなえてほしい）

二十　秋夜閑談

翰林学士非忿劇　翰林学士忿劇に非ず
吏部外員猶後群*　吏部外員猶ほ群に後れたり
言志閑談東閣*月　志を言ひて閑談す東閣の月
徇名遙愧*北山雲　名に徇ひて遙かに愧づ北山の雲
偶逢鮑叔能知我　偶たま鮑叔の能く我を知るに逢ひて

7，卿―郷（静、島、東北、山、神、賀）

【押韻】

×○×××○◎（下平声宵韻）　○××○××◎（下平声宵韻）
○×××○○×　○○○××○◎（下平声宵韻）
×○○×○○×　××○○××◎（下平声宵韻）
××○○○××　○○×××○◎（下平声宵韻）

【製作年次】

寛弘六年七月七日「七日庚申―略―可有御庚申事、可参者。参入程、陣方舞装束可　候者。有作文、題織女理容色、為時作序。」〈『御堂関白記』寛弘六年七月〉

【語釈】

◎織女理容色＝身なりを整える。身繕いをする。「停梭理容色　束衿未解帯」〈『古詩類苑』　歳時部「七夕」邢邵〉

◎寄言＝言いやる。ことばを伝える。

◎揺揺＝揺れ動くさま。落ち着かないさま。「行邁靡靡　中心揺揺」〈『詩経』王風「黍離」〉

◎理来＝来はほとんど意味のない添え字、理むというのと同じ。「脱有経過便　念来存故人」〈『全晋詩』「与殷晋安別」陶淵明〉

◎玉簪＝玉で飾った簪。「羅裳迮紅袖　玉釵明月璫」〈『全晋詩』巻八　子夜四時歌「春歌二十首」其の九〉「玉釵色未分　衫軽似露腕　挙袖欲障羞　廻持理髪乱」〈『全晋詩』巻八　雑曲歌辞「雑詩」〉

◎霞袂＝「挙袖弄雙鍼」〈『古詩類苑』歳時部「七夕穿鍼」劉遵〉「去衣曳浪霞応湿　行燭浸流月欲消」〈『和漢朗詠集』巻上「七夕」菅原文時〉

◎粧鏡＝化粧用の鏡。「落月移粧鏡　浮雲動別衣」〈『芸文類聚』歳時中　七月七日「七夕詩」隋　王胥〉

◎月眉＝三日月のような弓なりの眉。美女の眉の形容。「娟娟卻月眉　新鬢学鴉飛」〈『全唐詩』五二三「閨情」杜牧〉「莓苔踏破経年髪　楊柳未懸伸月眉」〈『文華秀麗集』「春日嵯峨院　探得遅字」嵯峨天皇〉

◎燕蘭湯沐＝燕は漢の孝成帝の皇后となった趙飛燕のことか。蘭湯は蘭を入れた浴槽。蘭湯に沐浴する故事は『飛燕外伝』に見えるが、妹の昭儀合徳に関するもの。「昭儀夜入浴蘭室。膚体光発占燈燭」〈『飛燕外伝』〉「浴蘭湯兮沐芳」〈『楚辞』「九歌　雲中君」〉

◎漢李声華＝漢李は前漢の武帝に寵愛された李夫人のこと。李夫人はその容姿で武帝の心を捕らえた。前句の飛燕と共に、地上を代表する美女を挙げてそれに勝るとも劣らない、身繕いする織女の美しさを彷彿させる。「孝武李夫人、本以倡進、初夫人兄延年。性知音、善歌舞。武帝愛之、毎為新声変曲、聞者莫不感動。延年侍上起舞、歌曰、北方有佳人、絶世而独立。一顧傾人城、再顧傾人国。寧不知傾城与傾国。佳人難再得」〈『漢書』「外戚伝上」〉（『芸文類聚』人部二「美婦人」楽部三「舞」にも所収）〉

◎声華＝評判、名声。「海内声華併在身　篋中文字絶無倫」〈『白氏文集』二三一九「余思未尽加為六韻重元九」〉

◎九霄＝天、天の高いところ。九天に同じ。「九霄応所侶　三夜不帰籠」〈『白氏文集』二三三三「失鶴」〉

◎乞巧＝巧を乞う。七夕の夜、牽牛と織女に書や染色、裁縫などの技能の上達を祈ること。「七月七日、為牽牛織女聚会之夜―中略

江吏部集試注（七）

木戸裕子

（承前）、（六）は『文献探究』第三十八号に掲載している。

凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。

一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

内閣文庫（旧浅草文庫）本―（内）　山口県立図書館本―（山）
陽明文庫本―（陽）　祐徳稲荷本―（祐）
静嘉堂文庫本―（静）　神宮文庫本―（神）
国会図書館本―（国）　無窮会図書館本―（無）
東大図書館（E45　656）本―（東A）
東大図書館（旧南葵文庫）本―（東B）
岡山大図書館本―（岡）
島原松平文庫本―（島）　東北大図書館本―（東北）
京大図書館本―（京）　多和文庫本―（多）
賀茂別雷文庫本―（賀）
名古屋市立鶴舞中央図書館本―（鶴）
本朝文粋（新日本古典文学大系）―（粋）
本朝麗藻（校本本朝麗藻）―（麗）

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟　花・華　叢・藂　窓・牕など。

一、割注など小書の部分は〔　〕に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※本稿では巻上十九番から二十三番までの詩を取り扱う。

十九　七夕守庚申同賦織女理容色応製*〔以嬌為韻〕

寄言織女意揺々　言を寄す織女の意揺々たるに
容色理来結契遙　容色理来（おさ）めて契りを結ぶこと遙かなり
頻整*玉簪霞袂挙　頻りに玉簪を整へて霞袂挙がり
閑臨*粧鏡月眉嬌　閑かに粧鏡に臨みて月眉嬌たり
燕蘭湯沐非同日　燕蘭湯沐同日に非ず
漢李声華伴九霄*　漢李声華九霄に伴ふ
乞巧慇懃天可許　巧を乞ふこと慇懃（ねむごろ）なれば天許すべし
徘徊*自恥馬卿*橋　徘徊（たちもとほ）りて自ら恥づ馬卿の橋

【校異】

1，製―制（山）　2，整―憖（底）他本二依ッテ改ム―整（多）
3，閑―閉（神）　4，霄―宵（内A、静、島、山、祐）
5，慇―殷（東大A）　6，徘―俳（島）